

氏名(本籍)	たに もと せい ごう 谷 本 誠 剛 (兵 庫 県)		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 乙 第 2013 号		
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	昔話と児童文学の文体と表現 - 昔話から創作昔話へ		
主 査	筑波大学教授	博士(文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学助教授		青 柳 悦 子
副 査	筑波大学教授	D. L.	川那部 保 明
副 査	共立女子大学文芸学部教授		定 松 正
副 査	成城大学短期大学部教授	博士(文学)	鶴 見 良 次

論 文 の 内 容 の 要 旨

「児童文学」のひとつの重要なジャンルに、英語圏で一般に「フェアリー・テール」と呼称され 19 世紀に成立した「(児童文学としての) 昔話」がある。本論文は、このジャンルを対象にし、その一般的な表現特性がいかなるものであり、それがどのように形成されたか、さらにその「昔話」から 1850 年代に「創作昔話」がいかに発展したか、そして、それはどのような特性をもっているかを、主として構造論(文法)的に、また歴史的に追求したものである。

論文の構成は、以下のとおり。

序 論 「児童文学としての昔話」とは何か

第一部 「三匹のこぶた」と児童文学としての昔話

第一章 「三匹のこぶた」の物語叙法と文体

第二章 「三匹のこぶた」の後半部と『ちびくろ・さんぼ』

第三章 もうひとつの「三匹のこぶた」- 教訓のある主観的な物語

第二部 「口伝えメルヒェン」と「読むメルヒェン」

第一章 場面の情景化と描写のふくらみ- 口承から再話へ (1)

第二章 語り手の自意識と教育的配慮- 口承から再話へ (2)

第三章 「進展型」から「挿話型」へ- 子どもの文章と昔話の文体

第三部 昔話(昔話型の物語)から創作昔話へ

第一章 「用言型」の文構造- 昔話型の物語の叙法

第二章 『黄金川の王様』と創作昔話

第三章 『バラと指輪』とフェアリー・テールのパロディ

おわりに

参考一覧

第一部では、子ども向けに再話されたいくつかの「三匹のこぶた」を対象として、「児童文学としての昔話」のありようを子細にたどり、児童文学の基本的な表現特性を構造論（文法的）的に追求している。第一章と第二章では、19世紀末の民俗学者・文学者であり、みずから「イギリスのグリム」と呼んだジョゼフ・ジェイコブズの「三匹のこぶた」を中心に、児童文学の原型としての昔話、および昔話型の物語の文体と表現の特性を析出している。第一章では、「物語の発端部」「物語の核心部」の物語叙法と文体が分析され、①「昔話型の物語の始まり方」②「会話体と繰り返し表現」③「並列構文と動的な文体」の観点から検討がなされている。第二章では、「物語の後半部」が分析の対象となり、異本としての『ちびくろ・さんぼ』との比較がなされている。第三章では、読み物としての性格が強いアンドルー・ラングの再話が、いかにジェイコブズのものとは異なるか、①「ラングの「三匹のこぶた」：教育的姿勢にたつ幼年童話」②「ラング型の昔話の文体：説明と描写」③「ヘンダーソンの「三匹のこぶた」：第三のタイプの文学的な物語」④「「三匹のこぶた」の幼年向けの再話と昔話の教育的意味」の観点から検討されている。

第二部では、一般に口承の物語がテキスト化される時、そこにどのような変化が起こるかが追求されており、具体的に、グリム兄弟やシャルル・ペローの昔話が用いられて歴史的に考察されている。第一章では、一般に「口伝えメルヒェン」から「読むメルヒェン」へと変化することで、何がどう変わるかが追及され、第二章では、グリム兄弟の再話とペローの再話を中心に、語り手の自意識と教育的配慮によってどのような変化をもたらされたかが解明されている。第三章では、口承の物語が「読むメルヒェン」に転換される時みられる文体の変化は、子どもの世界認識の変化とそれを反映する子どもの文章の発達と重なっていることが指摘されている。

第三部は、「昔話」から生まれ発展し、それとは異なるジャンルを形成している「創作昔話」の成立過程と特性とが追求されている。第一章では、1930年代のワンダ・ガグの絵本『100まんびきのねこ』の文字テキスト部分や昔話型の幼年文学を用いて、第一部と第二部で分析・析出した表現特性の整理がなされ、①「〈昔あるとき〉と始まる〈ロマンス文学〉」②「繰り返される言葉の持つ音の効果」③「並列型の叙法とハッピーエンディング」④「〈用言型〉の物語叙法」⑤「繰り返される物語世界」の観点から論じられている。第二章と第三章では、昔話の再話とは別のジャンルである「創作昔話」のあり方が、ジョン・ラスキン作『黄金川の王様』（1851年）とウィリアム・M. サッカレー作『バラと指輪』（1855年）を用いて追求されており、第二章では、①「『黄金川の王様』と語り口の間接性」②「〈アート〉としての創作昔話と自然観」③「『わがまなな巨人』の作品世界」が論じられている。また、第三章では、昔話をパロディ化する創作昔話の最初期の代表作『バラと指輪』を対象に、①「滑稽劇としてのフェアリー・テール」②「パントマイム劇の伝統と作品世界を視覚化する劇的手法」③「『魔法の魚の骨』と「子どもが書いた」パロディ」の論点から、創作昔話のあり方を検討している。

審査の結果の要旨

イギリス児童文学は多くのジャンルからなるが、そのおおまかな歴史的展開は、「フェアリー・テール」と総称される「昔話」から「創作昔話」、そして1860年代からおこる「ファンタジー文学」へとすることができ。この展開のうち、本論文は、「昔話」がどのように成立し、そこにはどのような特性があり、また、この「昔話」から「創作昔話」がどのように成立し、さらに、それが「昔話」とどのように異なる特性をもっているかを追求している。この歴史的展開のうち、本論文が「昔話」と「創作昔話」に議論を限っているのは、本論文が述べている「児童文学としての昔話」に、その後のジャンルの表現特性がほぼ完備していると考えられるからである。つまり、それは、「昔話」型の物語に、「小説」型の表現特性をくわえたものが、一般に「児童文学」と呼ばれるものとなっているという認識である。

本論文は、著者の永年にわたるイギリス児童文学研究、ひいては当該分野の総括としての意味をもち、従来の研究史でなされてきた成果を全体的・総括的にとらえ整理し、具体的作品にそくしながら構造論（文法的に、また、歴史的に追求したことにその特徴がある。第一部は、「三匹のこぶた」を典型的例として、「昔話」の構造的特性が追及され、第二部では、「昔話」が成立するための過程である、口承テキストから再話テキストへの展開がどのような特性をももったものであったかをペローやグリム兄弟の仕事を用いて追求し、「昔話」の特性をさらに歴史的に検討している。それは、イギリスの「昔話」が、ペローやグリムなどが集めた口承文化に根をもつ話の再話を翻訳することから出発したからである。そして、第三部では、「昔話」の未来型ともいえる「創作昔話」の特性を具体的作品にそくして分析することで、「昔話」の表現特性の持続性が証明されている。

本論文の成果は、こうしたイギリス児童文学の持続的要素、いわば「語りの文法」ともいべきものを析出したことにあり、この分野では最初の業績である。ここで析出された「昔話」の表現形式の特性を把握しておけば、その後のジャンルの展開は、それに何らかの要素が付加されたものとして理解しうることになった。それだけでなく、この文法を学ぶことによって、個々の作品の理解が深まるようになったといえよう。また、ここで析出された文法は、決してイギリス児童文学の根本的特性にとどまらず、いわゆる「物語」の文法でもある可能性があり、さらには、言語媒体によってなされるテキスト生成の文法の可能性すらあり、他の分野にも貢献しうるものである。

とはいえ、本論文に欠陥がないわけではない。まず、上述の可能的成果は、本論文の主張を裏切る可能性がある。もし、成果が他の分野にも適応可能というのであれば、それは、「昔話」の、さらにはイギリス児童文学の独自の特性とはならないだろうからだ。また、著者の意図にはないことであるが、そうした特性の確立に関与した歴史的要因への言及はときどきなされてはいても、常識の範囲を越えることがなく、本格的追求がなされず物足りなさが残る。さらに、第二部では、グリム兄弟の仕事の吟味はドイツ語によってなされているのに、ペローの仕事についてはフランス語によってなされてはいない。また、安易な断定的表現が本論文の随所に散見されるが、それは概説書ならいざしらず学術論文としては違和感を覚える。また、「昔話」「読むメルヒェン」「創作昔話」の、それぞれのメッセージ性をもっと強調してのべて欲しかった。とはいえ、こうした欠点も本論文の価値をそこなうものではなく、本論文の目的は十分に達成され、当該分野への貢献は大なるものであるといえる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。